連載

実験的教育論［6］

ディベートをカリキュラムに取り入れよう

広島大学大学院教授　町田宗鳳（まちだそうほう）

もはや受身では済まされない

国内外で開かれるいろんな国際会議に出席して感じることは、われわれ日本人が一般的に、十分なコミュニケーション・スキルを持ち合わせていないということだ。外国人参加者の発言が圧倒的に多く、日本人が聞き役に回ることが多い。ときに相手の発言内容に問題ありと感じても、それをあからさまに指摘して、波風を立てたくないものだから、じっと我慢して聞いている。その忍耐力たるや、大したものだと感心すらしてしまうことがある。

アメリカで貧乏学生だったときも、日銭を稼ぐために通訳のアルバイトをすることがあったが、業種にかかわらず、日本側のコミュニケーション不足に苛立ちを覚えたことがよくあった。貴重な意見や情報を持ち合わせながら、本番でそれを相手に伝えないまま、会議を終わることがあった。発言はしてみるものの、相手に理解されないとなると、簡単に引っ込めてしまうのである。

諦めが早すぎる。歴史、文化、宗教が異なる人間を相手に、それなりに込み入った話をするからには、丹念な背景説明が必要だし、相手が多少とも理解しはじめるま

で、同じ趣旨のことを、違った表現で繰り返し発言しなくてはならないことがある。欧米の言語というのは、淡白な日本語とは異なって、どこか粘着質だから、それなりのコンテクストの中で、説得力のある表現をしないと、相手にこちらの意が十分に伝わらないように思える。

あるいは婉曲的な発言を一、二度しただけで、相手が理解してくれたものと早合点することもよくあることだ。相手がにこやかに頷いたりすれば、てっきりこちらの意見に賛同してくれたと思い込むわけである。社交性に長ける欧米人は、そのようなジェスチャーを見せているだけで、主張は一歩も譲歩していないかもしれないのだ。いや、十中八九は、そうである。

たぶん、こういう重大な勘違いは、外交の舞台でもなされているように思われる。今まで各国に駐在する邦人外交官にあまた会ってきたが、確かにそのいずれもが磨かれたジェントルマンであっても、豪腕のコミュニケーターであるという印象を受ける人は、あまりいなかった。本気でコミュニケーションをするということは、それなりにガッツのいることだが、政治家や外交官がしっかりとしたコミュニケーション・スキルを身につけていなければ、国益を大きく損ねることになる。

ましてや自己の保身のために、ひたすら波風を立てないことだけを考えているような人間が、日本という国を代表するような立場に置かれていることがあれば、その被害は甚大である。

沈黙を好む日本の文化

それにしても、われわれ日本人がコミュニケーションを得意としないのは、単に英語など外国語による会話能力が不足していることに本当の原因があるのではなく、問題はもう少し根が深いように思われる。

まずは文化的な要素が原因している。日本には肝心なことについては、直観を重んじ、あえて言挙げしないという伝統がある。そのようなことを、武士道精神だの、禅思想だのといって、やたらと称賛するのは間違っている。日本の先住民の血をひくアイヌ民族には、チャランケといって、意見の異なる相手と徹底的に討論する風習があった。古代日本人は、意外と雄弁だったのかもしれない。

この国には沈黙が最大の自己表現であり、場の雰囲気を壊さないことを美徳とする文化もある。「和を以って、

貴しとなす」という意味を曲解しているのではないか。そのため、自己の思いを公然と表明することに積極的にはなりにくい。そのようなパフォーマンスをすれば、他者から嫌われるという不安もある。

次は社会的な理由である。上下関係が鮮明だと、どうしても目上の人の前では、言葉を慎むようになる。口幅ったいことを言って、睨まれたくないからである。これは日本人だけでなく、儒教文化が残っている韓国や中国でも同じような傾向があるように思われる。私はいろんな国の大学で講義をすることがあるが、総体的にアジア人学生は受身であり、教師として物足りなさを覚えてしまう。彼らは子どものときから、家庭でも学校でも権威主義的な教育に馴らされてしまっているのかもしれない。

それに日本語の構造から来るのか、どうも日本人の発言は前置きが長い上に、発言内容も曖昧なことが多い。日本語は俳句や短歌のような叙情的表現には最適の言語であるが、論理的整合性が求められる議論展開には不向きのようである。

だから外国人と話すときは、まず冒頭で結論をはっきりと述べてしまい、その後、その説明にかかるようにしないと、相手はしびれを切らせてしまう。最後まで聞かないと、問題に対してイエスなのかノーなのか、わからない話し方は通用しない。

おまけに一般的に、日本人の声は欧米人と比べて、細いというか小さいというか、腹から声が出ていないので迫力に欠ける。声の大きさは、発言の内容に匹敵するほど重要である。そのとき、相手と視線を合わせなかったり、うつむき加減に話したりすると、自分の意見に自信を持たないか、真実を語っていないように取られることはまちがいない。

だから日本人には、ことさらコミュニケーションの訓練が必要だと思う。小学校から英語教育を取り入れようという動きがあるが、それ以前にしなくてはならないのは、まず日本語で自分の胸のうちをはっきりと話す訓練である。日本語でもうまく自己表現ができないのに、英語の発音や文法を教えても、あまり意味がない。

ついでに言っておけば、英語はイギリス人やアメリカ人のように発音する必要はなく、明晰でさえあれば訛りがあってもよい。世界中の人たちが強いお国訛りで英語を話しているが、立派にコミュニケーションできている。そのへんに変な思い込みがあるから、日本人はよけ

いに寡黙になりがちのようである。

ディベートによって育まれるもの

表現力向上のためには、ディベートの訓練を小学校高学年あたりから始めるのが効果的だと思われる。教室で子どもたちを二分し、易しいテーマでよいから、その是々非々について、限られた時間内に明確に意見を述べ合う練習である。もちろん、ディベートは日本語で行えばよいが、高校生ぐらいになれば、ときどきは英語でやってみてもよいだろう。

いつか「国際化」という言葉が流行ったが、いまごろ何を言っているのかという印象をもった。そんなことをわざわざ言わなくてはならないほど、日本は国際化の流れに取り残されているのである。

国際化とは、国民が英語を話せるようになることではなく、まずどのような相手に対しても、偏見や差別をもつことなく、正面から向かい合い、自分たちの意見や思想をできるだけわかりやすく話せるようになることである。

ついでに英語教育についても愚見を述べれば、英語は教えるものではなく、使うものである。私の場合、大学の講義はほとんど英語で行っているが、生命倫理などについて、しばしば学生にディベートをさせている。

とくに倫理的葛藤が内容となっている映画を見せた上でディベートさせると、学生の問題意識が明確であるため、議論は白熱する。その際、大切なことは学生個人の意見を考慮せず、グループ分けをすることである。どちらのグループに入っても、理路整然と語り得る能力が貴重なのである。

効果的な発言をするためには、考えが整理されていなくてはならない。また自分の個人的見解に反するグループに入って意見を述べるうちに、相手陣営の言い分も理解されてくることもある。

ディベートでは英語が流暢であるかどうかは、あまり問題視しない。私が注意喚起するのは、発言内容の的確さと、発言するときの態度である。相手に反論するとき、あまり間を持たせるのもよくない。日本人は外国語を話すとき、頭の中で文章を作ってから話そうとする性癖があるが、それでは間延びしてしまう。話しながら考えるぐらいの敏捷さが必要である。そのような練習を重ねていくうちに、見る見る学生たちのコミュニケーション・スキルが向上していく。ぜひ教室で試してみてほし

い。

いつか英語特化コースを設けている進学校の英語授業を参観させてもらったが、先生が相変わらず紋切り型の文法を丁寧に板書して教えていた。正直言って、これでは教授法が百年遅れており、そのような教育を受ける子どもたちが気の毒に思えた。特化コースというぐらいなら、文法は教科書を読んで自習すれば十分であり、教室ではその実践的応用をしなくてはならない。

大演説をぶつ欧米、中東の人々

ところで、コミュニケーションが下手なのは、じつは日本人だけではない。欧米人や中東の人たちも、そうである。ただし、彼らの場合、舌足らずというのではなく、冗長すぎるのである。

自分の意見を滔々と述べるだけで、相手の意見にじっくりと耳を傾けようとしない。まるで機関銃のように間もおかずに、しゃべりまくる。もじもじして、はっきりと話そうとしない日本人にもイライラするが、こちらも頂けない。

この傾向は、おもに一神教的文化を背景にもつ人たちに顕著である。異教徒に囲まれても、断固として自分たちの信仰が正当であることを主張しなくてはならない歴史的な状況が彼らをそうさせたのかもしれない。私は今までイランとチュニジアで開かれた外務省主催「イスラム世界と日本――文明間の対話セミナー」に二度参加させてもらったが、次々と壇上に上がってくるイスラム教学者の大演説に辟易してしまった。それほど現代のイスラム教徒は孤立感を深め、自己防衛的になっているのかもしれない。

また別な会議で、今度はユダヤ系アメリカ人の学者と生命倫理について論じることがあったが、こちらも負けず劣らず、自己主張が激しい。建て前ばかりをまくし立てるものだから、話し相手と互いに譲歩して認め合うということがない。「黙って人の話も聞きなさい。だからあなたたちは、世界のあちこちで他民族と衝突してしまうのだ」と言いたくなってくる。

日本が開かれた国になるということは、つまりわれわれ国民がそのような人たちとも対等にコミュニケーションできる国民になるということである。それがいかに大変なことか、容易に察しがつくだろう。内向きの国民性をもつ日本人には、相当の意識改革が必要となる。

だからこそ、私はディベートの練習を学校教育の中に

取り入れてほしいのである。知識や情報は、本を読んだり、専門家の話を聞いたり、インターネットを調べれば、手に入る。しかしコミュニケーション・スキルは時間をかけて身につけていくよりほかない。

日本文化をどこまで語りえるか

なぜ、私がそんなにコミュニケーションにこだわるのかといえば、現代日本では日々の生活の場において、家族や同僚との語らいが急速に減っているからである。私はアメリカで十数年暮らしたが、個人主義の本場の国にあっても、日本の都会よりも、もう少し隣近所とのコミュニケーションが成立していたように思われる。とくに東京のような大都会での暮らしは、人間砂漠の中で孤立しやすく、精神疾患を病む人が少なくない。

共同体の崩壊というのは、じつは組織的なものではなく、コミュニケーション不足が最大の原因となっている。核家族化や少子化に歯止めが利かない現状にあって、コミュニケーション改善は、国民全体が意識して取り組まなくてはならない重要項目である。

もう一つの理由は、日本人がもっとコミュニケーション・スキルを身につけて、この国に伝わる大切な精神遺産を世界に伝えていく文明史的な節目に来ていると予感するからである。それは単に日本を宣伝することではなく、日本文化の深層に潜む普遍的価値観を語ることである。

とくに縄文時代以来、脈々と伝わる日本人の生命観が二十一世紀における新しい文明の形を作る上で、果たすべき役割が小さくないと考えている。これからは個人の能力を問う近代主義から、もっと地球環境の〈いのち〉を大切にするホリスティックな思想に移行していくだろう。でなければ、人類の未来がなくなる恐れすらある。

だからこそ、今はグローバルなスケールで、日本文化を語り得る人材が求められる時代である。かつては西洋の文物を学んで、日本に紹介する人材がエリートとされたが、これからは逆転の現象が起きるだろう。日本の深層文化を理解していなければ、国際人になり得ない。私自身もそのような心構えで学問をしているし、これからの日本を背負う若者には、とくにそのような自覚を促したい。